様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月１０日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：19530756
研究課題名（和文）　多民族社会における教育の国際化の進展に関する国際比較研究

研究課題名（英文）　International comparative study on the progress of the internationalization of education in multi-ethnic society

研究代表者
竹熊尚夫（TAKEKUMA HISAO）
九州大学・大学院人間環境学研究院・准教授
研究者番号：10264003

研究成果の概要（和文）：

本研究は、アジア、オセアニア地域の多民族社会において、中華系住民を中心として、移民の背景を持つ少数民族が民族教育や教育への志向性や熱意によって､それぞれの国際性を活用し、民族教育の発展や地域社会の民族の統合状況を明らかにすることで、言語教育、英語教育そして多様な海外文化を移民先の社会に取り込み、教育の国際化に寄与すると共に、人材育成においても社会発展に貢献している状況の一端を示したものである。

研究成果の概要（英文）：

This research project tried to clarify some educational effects of each ethnic community's language (English or Ethnic), culture, historical study and the zeal for education. These ethnic distinctions mutually give some merits or contributions to the each of host and guest society, through the multi-ethnic co-existence education. They can be the evidence to internationalize/modernize the society. The target regions are cities in Philippine, Fiji, Borneo (Malaysia), Australia and Singapore.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	300,000	90,000	390,000
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
２００９年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１０年度	1,200,000	360,000	1,560,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：比較教育学
科研費の分科・細目：教育学・教育社会学
キーワード：比較教育学・多民族社会・民族教育・教育の国際化・フィリピン・マレーシア・フィジー・オーストラリア

１．研究開始当初の背景

一般に教育の国際化とは、グローバリゼーションに基づく、教育内容・科目の英語化を意図する場合が多い、しかしながら本研究では、国際化を単に英語として捉えるのではなく、多民族社会を構成しているそれぞれの民族の内的･外的な活動に焦点を当てる。即ち、国内の民族のいわゆる「民族際」が「国際」の基盤となりうることを示し、多様な民族の国内的な教育活動（教育権の認知、文化紹介・伝達、他の民族や政府との連携と共生）

と、海外との連携を持つ教育活動（祖国との連携、留学、人材養成、移民の子どもの受け入れ）とを同一の視点から繋ぐものである。このことによって、教育の国際化は英米偏重や国際基準の受け入れといった画一的な国際化から脱し、それぞれの民族や地域での様々な「人(citizen)」を本位とした、多様な国際化のあり方を育み、民族間の相互認識を転換し、自律的な教育の発展、近代化と伝統の保持と再調整を図ろうとするものである。

２．研究の目的

本研究は多民族社会において、それぞれの民族がその特有の状況下において、文化的・社会的特性を発揮し、教育面でいかに国際的な特色を有しているか、そして民族独自の国際的な教育連携を築くことで、それぞれの国・地域が総合的に見てどのように多様な教育の国際化を遂げているかについて、現地調査を基に明らかにすることを目的としている。

３．研究の方法

具体的な調査対象国（地域）としては、マレーシア、シンガポール、フィリピン、フィジー、オーストラリアを予定した。比較対象として日本の状況も踏まえながら、それぞれの国における民族に関わる教育の国際化状況を総合的に明らかにする。対象とする民族集団は、殆どの国で少数民族、特に移民である中華系そしてインド系、そしてマレー系に焦点を当てる。

教育の国際化の進展の指標として、初等・中等教育段階においては、民族学校の設置状況、対象民族とそれ以外の混成状況、民族系の言語の配分、民族言語学習の利点、言語・宗教教師の養成過程、その養成過程としての留学の位置づけ、高等教育における入試科目化、言語・宗教・民族別の受け入れ制度(大学準備教育、留学生受入、授業内容)、民族教員の養成プロセス、民族教員や民族学生を活用した海外提携などを調査項目として挙げている。

先述した調査対象と調査項目について、選定された学校、大学を訪問調査することによって、研究の目的で述べたように、民族教育とその活動が、当該社会の国際化において一つの基盤となるという仮説的言説を立証する事例を提示することにある。即ち、それぞれの国において、エスニック・マイノリティの民族学校教育は祖国と有機的連携を維持しながら、それ以外の国の同じ民族系集団ともネットワークを持ち、当該社会において多文化的状況を豊かにし、そのことで教育面における国際化が進展している状況あるいは事例を調査データに基づき明確に示すことである。比較教育学においては、それらの事例の比較を通して、新たな教育の枠組みを構築し、公教育の中での、民族教育の位置づけを再考する。

４．研究成果

研究調査の概要：

本研究は海外調査の準備期間として第一年度をおき、四か年における研究計画、調査研究の課題の共有をおこなった。第一年度では、研究の枠組みからそれぞれの特徴あるデータを収集できる領域を選択し、各年度における対象国の中での研究調査対象をより具体的に設定、分担し、総合していくことが確認された。また、中心的な研究課題である、民族的多様性が国際化に果たす役割を各自の領域と研究視点から明らかにしていくことが共有された。

また、本年度ではシチズンシップ論と本研究課題との関わり、比較教育学及び、比較研究の理論からの本研究の位置づけ等について協議を行った。特に、移民の定住化プロセスもしくは社会とコミュニティ・居住状況に応じてその進度や程度によって段階を設定し、「移民/ホストゲスト→定住/エンクレイブ（囲い地）→分住化（学校の形成）／多元的・民族コミュニティ（共同体）→分散：身体・内面化（学校のネットワークハブ機能）／シチズンシップ・市民概念での社会再編：新理念形成」の進行に応じて分類し、教育やシチズンシップ論、アイデンティティ、文化・言語教育理念の展開を、各国の状況に応じて明らかにできるような課題として各分担者が検討することとした。

同様に、比較教育学研究理論からは、いわゆる社会倫理と移民（学校・教育）倫理の不整合やズレ、集合的／個人的アイデンティティや個人のメンバーシップ的属性の「組み替え／順位再配置」に国家やメタ的社会ではない、民族をベースとした学校教育がどのように機能するかについて検討した。この他フィリピン、フィジー、マレーシアの教育統計や政策文書を国内で収集した他、華僑・華人、及びインド系の学校教育についてもインターネットや研究文献の収集を行ってきている。これらの成果は、竹熊尚夫が研究論文等で一部を成果として発表した。

第二年度のフィリピン調査は竹熊尚夫・竹熊真波・長濱博文の３名で平成 20 年年 8 月 18 日～23 日にマニラを中心に行った。多民族社会における中華学校を中心に、中華街の中心に位置し、中華系の生徒・教師を主体とした中華系の名前を冠する学校、郊外に近いカトリック系のエリート学校だが中華系の生徒が多い学校、郊外の高級住宅街に位置す

る富裕層を中心としたエリート中等学校などの３種類の中等学校に訪問し、校長、教頭、語学教師など関係者との面接、資料収集等を行った。

このほか、高等教育における民族と国際化の関わりについて、アテネオ・デ・マニラ大学、フィリピン国立大学、国立フィリピン師範大学の国際交流部及び関係部署を訪問し、インタビューと情報収集を行った。フィリピンの収集データを整理し、一部を論文にまとめ発表すると共に、前年度から継続している民族学校の多民族社会における研究の位置づけについて論文をまとめこれも公表した。

フィリピン調査では「チノイ」と呼ばれる中華系フィリピン人は一般の公立学校に通い、フィリピン社会では古くから順応し、フィリピンナショナリズムのもと統合され、また、キリスト教系のアジア人としてそれぞれの持つ文化性が見えにくくなっている。

こうした民族系の学校はそれほど多くはないものの、中国語教授や養成される学力の高さから、中等教育、高等教育の教育機関を運営し、教科書、教師採用などにおいて台湾や大陸との関係も保持していることが明らかとなった。

コミュニティとの関係においては、中華街のような境界は日本のように明確ではなく、統合されながらも中華文化としてのルーツを維持し、また、フィリピン特有の地域差や多宗教・多民族性、チノイでありながら独立の英雄であるホセ・リサールの存在などから、タイやマレーシアのような閉鎖的かつ先鋭的でない、開放的、統合的ナショナリズムとしてのフィリピン独特のあり方が予見された。教育の国際化については、民族学校と民族コミュニティ、より大きなフィリピン社会との関わりにおいて中華学校は中国語圏への学習の窓口となりマニラの高等教育と並んで地方や異民族から海外への結節点となっていることなどが確認された。

第三年度にはフィリピンの補足調査を長濱が平成22年3月6日より16日まで実施した。これはマニラで実施したが、教師教育研修の実態とムスリム生徒への価値教育に関する実践調査を行った。このほか、第三年度の課題であるフィジー調査は竹熊尚夫及び竹熊真波が平成21年8月13日～18日にかけて実施した。ここでは JICA の協力も得て、フィジー系学校調査を行った他、南太平洋大学のフィジー系及びインド系教育研究者との協議、インド系学校調査、中華系の政府補助学校の訪問調査などを実施した。

フィジー調査によって、フィジーは極めてマレーシアの民族対立状況に近似していることが判明した。これは移民であるインド系と先住民であるフィジー人の教育政策として人材養成の競合や英語の共通語と共に、フィジー語の必須化という政治的、政策的動向からも明らかとなっている。ここに多民族社会での教育面における政治的コンフリクトと統合の問題の一つの事例が抽出できる。

加えて、フィジーには歴史的に古い中華学校もあるが、近年農業移民としている中国大陸からの移民の増大による中華学校の拡大と抑制やムスリム系インド人移民の問題など、世界の各地で先鋭化している教育場面での民族問題を同時並行的に解決せざるを得ない状況がグローバリゼーションや教育の国際的ネットワーク化(中華学校での大陸からの教師の派遣など)として今後更なる研究の必要性がある。

また、南太平洋の文化・価値というフィジーの多民族社会の統合的中核、南太平洋での学術文化の中心というフィジーの地位から教員養成等において南太平洋伝統文化と価値の強調と普及という役割は、フィジーのみならず、他の島嶼国にも影響を与えていることも明らかとなった

最終年度である第四年度は、オーストラリア調査については長濱が、平成22年11月1日～11月12日の日程で実施し、オーストラリア国立大学、シドニー大学及びニューサウスウェールズ州の独立学校を訪問した。シンガポール・マレーシア調査については竹熊尚夫・竹熊真波の２名が平成22年８月10日～8月21日に実施した。シンガポールは短期間の訪問となったが、南洋理工大学を訪問し、中華系の研究者、中国語教師等との面接を実施した。また、マレーシアではサラワクを拠点として、クチン、シブの二つの都市における中華系教育団体や、中華系学校を訪問した。

マレーシア調査は、クチンとシブを中心としたが、前年にコタキナバルも同時並行での別科研費調査で中華学校等への調査を行っている。これらの調査においてボルネオ島のサバ州、サラワク州における中華系の学校の特徴を浮き彫りにすることが出来た。マレーシアの半島部の中華系の民族学校教育と異なり、両州の民族教育は、三言語主義をもち、フィリピンとの近似性を持つ。マレーシアは連邦制の国家ではあるが、教育の中央集権度は強い。しかし、サバ州、サラワク州の独自性は、中華系の学校、教育での融合度も半島部とは異なっている。これは中華系の独立学校の連合体である、董総にしても全国の董総とは一線を画している。この他、出身地域のまとまりやクラン（氏族）でのまとまりなどを輻輳的、重層的に活用しつつ異文化を持つ子どもたちの生育環境を整えている姿が明らかとなった。

本研究成果報告書は冊子体でも刊行した。このうち２点について成果の秩父として以下報告する。

フィジー：近代化と民族共生のジレンマ

南太平洋大学での研究者とのインタビューによれば、イギリス植民地期のフィジーは植民地期のマレー半島とも近い環境におかれている。政府率のフィジー人のエリートスクール、ヨーロッパ人のためのグラマースクール、そして、1929 年以降インド人が創設したインド人学校である。結果として一般のフィジー人への教育は多民族に対して遅れることとなった。その後、フィジー人社会の近代化は徐々に進むことになるが、英語化されることで、どちらかと言えば、シンガポールに近い構造となっている。だが、異なる点は、英語を公用語とする点のみで、インド系が社会・経済的には実権を握り、政治・軍事的にはフィジー人との抗争が後を絶たない。近年、英語化一本のみではなく、それぞれの民族言語の教授も重視されているように見受けられる。

フィジーでは 2000 年に教育省により、小学校第 5 学年の生徒がヒンディーの生徒がフィジー語を学び、フィジーの生徒がヒンディー語を学ぶというプログラムが開始された。ヒンディー語の会話の中級レベルのテキストは、フィジー教育省によって発行されたものであった。この計画は 2001 年には 6 学年でも実施されるとあるが、その後のインド系とフィジー系間での紛争後の進捗状況は確かめられていない。

この目的には、ヒンディーでないフィジー生徒へ基礎的なヒンディー語を教授促進、ヒンディーを話す人々やコミュニティと異なる言語的文化的背景を持つ人々コミュニティとを繋ぐために、基礎的なヒンディー語と文化を導入する。二つの主要な人種がお互いにお互いの文化や言語を学び、近づけるためという、以上三つがあげられている。具体的な目標にはヒンディー語の音の理解、基本的単語の理解と使用、簡単なヒンディー語の会話、インド社会の基本的文化の理解と文化間関係の促進。が挙げられている。

市街で購入したヒンディー語のリーディングテキストでは、初版 1979 年、1991 年再刊の、教育省発行のものがある。内容は、イソップなどの寓話も取り込まれている。一方、フィジー語教科書も政府供給局により配布されている。

これ以外にも、フィジーにおける民族間交流のための異なる文化理解のための副読本が幾つか出されている。

まず、「フィジーの学校における異文化経験」が世界教会系(World Council of Churches)のセンター ECREA(ecumenical Centre for Research, Education and Advocacy)から出版されている。この他に、「人種主義と差別:私たち人間家族におけるスキャンダル分裂」も 2002 年に出版されている。これらはキリスト教系のフィジーにおいて、教育の領域においても有効に進展していることが予想される。しかし、逆に二大民族の対立・葛藤も容易には解決していないことも予想されることである。

一般の公立学校においても、社会科の生徒用図書(Pupil's Book：小５、中２)ではフィジーの生活、伝統と近代化そして、インド系についても記載されている。近代社会にはインド人が融合しており、インド系を抜きには社会科は成り立たない状況がある。

言語や文化以外の国別の相違には、それぞれの宗教においてヒンディー、キリスト教、少数のイスラム教という相違の他、フィジー人に属する土地の権利、マジョリティとしてのインド系とマイノリティとしての中華系という立場の相違などを挙げることが出来るが、もう一つ検討しておかなければならないのは、先に述べた、教科教育と社会構造の関わりの中での近代化の担い手である民族と、近代的教育の必要性、妥当性という認識やニーズであろう。

高等教育では南太平洋大学や国立の教員養成機関では「文化的に民主的な教師教育に向けて」あるいは「教育と社会についての教授にローカルな知識を組み込む：フィジーの事例」などというユネスコと南太平洋大学の共同で冊子を作成している。フィジーアイデンティティを強く持つフィジー系の研究者によるとフィジー語や南太平洋言語・文化を維持するための活動が活性化しているということである。こうした視点は、地域の伝統文化・言語を主体として、地方のフィジー人社会や南太平洋社会への寄与として、地域社会の伝統に根ざした近代化のための教育側からの取組と捉えることが出来る。

一方、先述したようなインド系とフィジー系の融合や、将来的に危惧される中国人の移民の増大から来る、中華系とのコンフリクトへのプロアクティブな対応策ともなると予想される、異文化、異民族の混淆社会を前提とした、言語・文化学習や統一的アイデンティティへの形成を目指した教育も見られている。これらはユネスコや、キリスト教会系の団体などが主導して、マレーシアよりも社会状況への対策としては、比較的早期に柔軟に実施されているように思われた。これはまだ印象の域を出ないが、範疇となる社会をマクロに設定した多民族混淆尺度という相対的時期としてであり、先に挙げたようなフィジー人にのみ適応されるような近代化尺度による相対的時間設定ではなく、多民族の融合混淆度あるいは社会統合の程度を一部、発展・進展の時間設定をすることで判断できる時間尺度で考えた場合である。ミクロな個別事例では多くの反例があると思われる。

いずれにしても、フィジーはまだ、フィリ

ピンやシンガポール、オーストラリアのように移民の出身地や関連諸国の国際的教育交流による寄与は強くなく、マレーシア半島部やボルネオ島嶼部のような地域社会内や国家内での結束と対立構造が鮮明化しており、教育においても、他言語学習と、異文化理解による民族間の相互理解が主たる目的になっている。ただ、イギリス植民地統治を経験し、英連邦との関係を持ち（脱退、復帰、資格停止を経、現在、参加資格停止を受けている事情はあるものの)、JICA などの支援もあるように、国際支援はフィジーの特色である。

フィジー人社会において伝統からの近代化が今の時期に進行していること、そして、南太平洋地域から、トンガやバヌアツなどの多くの若者を受け入れ教育を提供するという、南太平洋教育のハブあるいはサブ的な COE としての地位と役割を果たすという使命と誇りをもって受け入れている点、そして、インド系が社会経済そしてしばしば政治も動かしており、政治的紛争が絶えず、教育の活動に持ちたいが見られる点がこれからのフィジーの教育を形作っていくことになると思われる。その際、インド系や将来的な中華系、そして先住民などとしてのフィジー人を初めとする南太平洋諸民族と海外の支援組織との相互作用によって、国際化が図られることとなると思われる。

中華系にみる教育環境整備と教育への貢献

マレーシアの島嶼部にあたるボルネオ島の２州である、サバ州、サラワク州が半島部と異なり、独自性やフィリピンとの近似性を持つことを上で示したが、以下、サバ州とサラワク州の違いと、フィリピンから半島部マレーシアへと繋がるスペクトラムの中での位置づけを行う。

2009 年に社会問題となった、民族間結婚によって生まれたこともの扱いはサバ州とサラワク州では異なる。ブミプトラの一部である先住民と他の特に、中華系との種族間結婚で産まれた子どもは、高等教育への進学がブミプトラに優先されていることから、どのカテゴリーに属するかが社会的にもセンセーショナルな話題となる。

2009 年に起きた問題は、イバン族の父親と中華系の母親の間に生まれた子どもが、ブミプトラとして認められるかどうかと言う問題であった。(Borneo Post, 30, October)

結果としては、マレーシア憲法の第 160 条、161 条の規定を踏まえた回答が、政府、登録局および教育省よりあった。先ずこうした子どもは半島部では、何れかの親がマレーもしくはオランアスリであれば、ブミプトラと認定され、サバでは父親がサバ生まれの先住民の子孫であればブミプトラと認定される。サラワクではサラワクの先住民と規定された人種に属すか、それらのミックス（中華系は含まれない）であれば、ブミプトラとする、という規定に沿って、サラワクの中華系とのダブルはブミプトラと認定されないこととなったのである。異なる人種民族を親とするサラワキアンにとってこれは大変な問題となった。

この問題は、その種族に属するかによってブミプトラと見なされるかが決定されるため、若干の議論の余地が残されているが、この事件が示すものは、サバの Sabahan サバ人としてのまとまりが居住地と父親で先住民性が規定され、サラワクでは関連種族が規定される中で、その混合しかブミプトラとしないというマレーを含む先住民と中華系移民を分断する規定となっていることである。

サバ州は、元来、独立度の高い州であり、先に述べたように、中華系も三言語主義をとり、社会への融合度も高い。その代表的な学校である崇正中学は 1965 年創立で客家系であった。学生数は 2300 人、中学から高校までをカバーする。日本、香港をはじめ、オーストラリア、ニュージーランド、台湾、中国、シンガポール、カナダ等との海外交流も盛んで、進学率は 90%を超える。

崇正中学は華文独立中学であるが、生徒は独中の統一試験だけでなく、政府の統一試験そして、英国のロンドン商工会議所試験（LCCI)も受験する。即ち、グローバル、ナショナル、そしてローカル（エスニシカル）という三次元の教育を実施している。

一方、サラワク州で行った地方都市と、州都の２箇所の調査で中華系の、２段階、３段階の選択肢を築く教育体制が明らかとなった。同様の状況はサバ州でも見られると思われるが、まずは華語と中華文化の伝達であり、中華コミュニティでの進学の道の形成である。これがネットワーク化して連合体をつくり、全体としては董総や董教総となる。ただし、これが地方と中央とで、それぞれが独立したものとして存在している。ここにも、ローカル、ナショナルな２つの局面が見られた。サラワクの独中はインドネシアからも学生を受け入れるなど、中華文化を強調する中で中華国際学校の様相を見せていたが、これはグローバルな展開となる。

次の選択肢は政府系の学校に取り込まれる中での中華系の子どもの進学先の確保である。潮州公会は元来、華文独立中学を支援していたが、その中で、半島部でも見られたような独中から政府系への転換が第二中学で起こっている。現在のクチンの中華独中は第一、第三、第四であり、第二はクチンハイスクールとして、政府系の優秀な学校となっている。潮州公会は結果として、２つのタイプの学校、政府系学校と民族系学校をそれぞれ支援することとなったのである。

以上のサバ、サラワク州の事例のように、それぞれの民族学校はそれを支援する社会コミュニティ、民族コミュニティの組織化に大きく影響を受けつつ、ボルネオという遠隔地にありながらも、基盤とする地域社会を保持し、その変化に鋭く対応し、次の世代のための教育を模索している姿が見られた。これは個々のアイデンティティや個人のレベルでは、更に多様であり、既に中国語から離れ、英語とマレー語で進学就職を目指す中華系マレーシア人は多くいるであろう。

ただ、ブミプトラ規定で見られたような、ナショナルな強固な枠組みと、アファーマティブアクションを含むその教育システムが各民族間の融合を逆に妨げる場合もある。一方で、社会を取り巻くグローバルな環境は、中国語の有用性、活用性を高めている。中国語教育に固執する半島部の董総は、半島部のマレー系に対するマイノリティとしての定住コミュニティとしての民族教育へのこだわりが強いが、ボルネオの中華系はマレー系が非常に少ないという環境のためか、現地先住民への融合性や移民コミュニティとしての柔軟性を保持していると見られる。

ボルネオの中華系の教育は、多くは、ローカル（エスニシカル）とナショナル（マレーシア）を二本立てとして、華語を強調するものである。だが、サバの崇正中学のようなこの二つにグローバル（中華世界、英語圏）を繋げた中・馬・英という三言語主義は実践面で厳しい課題に対峙することにはなるが、学校を挙げてそれを表明できるのは、ナショナルな学校ではなく、独立中学たる所以であろう。また、教育程度や産業、親の経済状況等を相対化すると、高等教育段階での海外への留学はボルネオは多いのではないかと考えられるが、このようなローカルな地域や民族コミュニティから海外への留学し、再びマレーシアに戻ってくる人材について今後検討していく必要があるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①竹熊真波,「フィジーの教育と国際化～民族共生の視点から」,『福岡国際大学紀要』, 25 号, 2011 年, pp.15-24,査読有

②竹熊真波,「フィリピンにおける中華学校について」,福岡国際大学紀要,21 号,2009, pp.1－10,査読有

③竹熊尚夫,「多民族社会の教育研究における民族教育制度の視座―比較教育学的考察―」, 『九州大学大学院　教育学研究紀要』, 11(通巻 54), 2009 年,pp.45-60,査読無

〔学会発表〕（計４件）
①Hirofumi NAGAHAMA, “The Readiness for Promoting Holistic-Integrated Approach: the Case of the Philippines”,第 21 回日本カリキュラム学会,2010. 7. 4, 佐賀大学

② Hirofumi NAGAHAMA, “ The Curriculum Development on Teaching Values in the Philippines in terms of the Teachers’ Value Understandings”,第 46 回日本比較教育学会, 2010. 6.27,神戸大学

③長濱博文,「価値の概念形成を促すカリキュラム・ディベロップメントーフィリピンにおける価値の明確化理論による平和構築ー」,第 20 回日本カリキュラム学会,2009 年 7 月 14 日,神田外語大学

④竹熊尚夫・竹熊真波・長濱博文,「フィリピンにおける民族共生と教育―中華学校のカリキュラムを中心に―」,第 45 回日本比較教育学会,2009 年 6 月 28 日, 東京学芸大学

〔図書〕（計２件）
①竹熊尚夫,「多民族社会における教育の国際化への展望」,『21 世紀の教育改革と教育交流』,東信堂,2010,pp.234-248

②長濱博文,「フィリピンにおける価値の明確化理論の可能性」,『21 世紀の教育改革と教育交流』,東信堂,2010,pp.150-165

〔産業財産権〕　なし

〔その他〕研究成果報告書刊行

６．研究組織
(1)研究代表者
竹熊　尚夫（TAKEKUMA HISAO）
九州大学・大学院人間環境学研究院・准教授
研究者番号：10264003

(2)研究分担者
竹熊　真波（TAKEKUMA MANAMI）
福岡国際大学・国際ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学部・教授
研究者番号：50253373

長濱　博文（NAGAHAMA HIROFUMI）
九州女子大学・人間科学部・専任講師
研究者番号：00432831

(3)連携研究者　なし